

新たに導入した植物の開花・結実 *Impatiens*, *Aristea*

濱 谷 修 一

ツリフネソウ (*Impatiens*) 属 その2

1992年から、種子交換によりツリフネソウ (*Impatiens*) 属の収集を行っている。これまでに数種が開花・結実し、その中から園芸的に有望な形質を持つ種について栽培記録の中で報告してきた。今回は、その後新たに開花したものについて報告する。

Impatiens glandulifera Royle.

原産はヒマラヤ。1993年10月、ミュールハウゼン植物園(ドイツ)より種子を導入した。11月上旬にバーミキュライトに播種したところ、速やかに発芽した。1994年2月下旬に定植した。用土にはボラ土の微細粒、赤玉土の小粒、腐葉土を等量混合したもの少量のマグアンプKを加えたものを用い、6号プラスチック鉢に鉢植えとした。

葉は単葉で楕円形、鋸歯縁。葉の表面は、葉柄および葉脈が赤くその他の部分が緑色で、コントラストが美しかった。茎は立ち上がり、各節に葉が3枚ずつ輪生した。5月上旬から開花し、開花時の草丈は約90cmであった。花序は上位の葉腋から発生し、1花序には3~5個の花蕾がついていた。花色は赤紫色。花の横径は2.5~3.0cm。距は短く、下向きに曲がり、翼弁の先から距の先までの長さは約4cmであった。1花の寿命は3日前後。結実はみられず、1994年8月上旬に枯死した。

昨年度の栽培記録(15号)において報告したツリフネソウ属2種について最低12℃の温室内で越冬するかどうか調



Impatiens glandulifera

べたところ、*I. balfourii*, *I. scabrida*ともに12月から2月の間に枯死した。なお、前者では春まで、こぼれ種の発芽が見られなかったが、後者では12月頃こぼれ種の発芽が見られた(共に温室内にて)。

アヤメ科の多年草

著者は、1992年以来アヤメ科の植物の収集に力を入れている。前述のツリフネソウ属同様、種子による導入が主であるが、これまでに開花した2種を報告する。

Aristea cyanea Ait.

原産はアフリカ南部。メルボルン王立植物園(オーストラリア)より種子を導入した。1993年1月中旬にバーミキュライトに播種し、最低3℃で管理したところ、同年5月上旬に発芽した。同年6月中旬に、ボラ土(微細粒)、赤玉土(小粒)、腐葉土の等量混合土を用いて6号鉢に定植し、その後秋まで屋外で管理した。冬季は無加温霜除けの条件下で管理したところ、翌1994年6月6日に開花した。

開花時の草丈は約50cmであった。花茎には鞘状の苞葉があり、苞葉の基部から3~4花をつける花序を出した。下位の苞葉の基部からでる花序ほど長く、最も長い花序の長さは約10cm。花色は薄紺色。花の直径は約25mm。花被片は外



Aristea cyanea

花被3枚，内花被3枚の合計6枚。花被片の大きさは，外花被が縦12mm×横3mm，内花被が縦12mm×横8mmであった。1花当たりの寿命は半日であった。

Aristea macrocarpa G. J. Lewis

原産は南アフリカ（ケープ地方）。アムステルダム大学植物園（オランダ）より種子を導入した。1992年10月下旬にバーミキュライトに播種し，最低3℃で管理したところ，翌1993年4月中旬に発芽した。同年6月中旬に，前種と同様に定植し，その後も同様に管理した。翌1994年6月27日に開花した。

開花時の草丈は約50cmであった。前種と草姿

はよく似ていたが，苞葉の基部からでる花序には2花をつけ，花序の長さは長いもので約5cmであった。花の直径，構造，寿命は前種と同様であったが，花被片は前種に比べて大きく，外花被は長さ12mm，巾5mm，内花被は長さ16mm，巾9mmであった。

今回報告した2種は，いずれも1花当たりの寿命は半日と短かったが，次々に開花したので1株当たり約1ヶ月花を見ることができた。これらは常緑の多年生草本（宿根草）で，本年度においては霜除け下で栽培したが，今後，露地での栽培の可能性について調査し，屋外の植栽に利用していきたい種である。

平成5～6年の園内植物開花記録

井上尚子

平成5年1月から平成6年12月までの2年間，園内に植栽された植物および自生の植物についての開花状況を調べたので，報告する。

方法

平成5年1月から平成6年12月まで，7～14日に一度，園内を任意に歩き，開花している植物名を記録した。ただし，3月下旬や4月上旬など，開花始めの植物が多い時期には，2，3日おきに記録をとるよう努めた。

結果

平成5，6年の屋外の植物の開花記録を表1～5に示した。表1はサクラ，表2はツバキ，表3はウメ，表4はボタン，表5はそれ以外の植物についての開花記録である。また，平成5年の開花始めは□，終わりは+，平成6年の開花始めは◇，終わりは▷で表した。ただし，年をまたがって開花した植物については，その前後の年の開花始めや開花終わりの時期をあわせて示した。

なお，開花を記録した植物数は600種にのほがるが，本報での表記は紙面の都合上，その一部にとどめた。

今後の課題

全体の開花記録をみると，平成6年にはカンザクラ早咲き系やシナマンサク，ウメのマキタテヤマなど，12月から2月の間に咲き始める植物の多くの開花始めが，平成5年と比べて早いことに気づく。逆に，ホトトギスやチャ，ツブキ，ヒイラギなど，8月の終わり頃から10月の終わり頃にかけて咲き始める植物の開花始めは，前年に比べて1週間から1ヶ月遅くなる傾向があった。ところで，平成5年は日照不足，平成6年は水不足という異常気象があり，当園にも植物の開花状況に異変がないかどうか等の問い合わせが多数あった。今回の記録から読み取れる前述したような現象と異常気象とに因果関係が認められるかどうかは明らかではないが，このような基礎的な調査は今後も続けていく予定である。その際，指標植物となるような樹木や多年生草本を選定して行っていきたいと思う。